GLOBE Voice

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies 2012 Number 5

東京外国語大学

Gaze at the World

The “Master Plan”
of the university aims at ‘transforming itself into
a strategic centre
for teaching and research that envisages
an era of global society’.
In tandem, our “Action Principle”
is ‘interacting with the global society’.

地球社会と
ともに歩む

2012年４月、東京外国語大学は新しく生まれ変わる。外国語を通じて世界の諸地域への理解を深める——。この基本理念のもと、これまでよりさらに国際社会に幅広く貢献できる人材の育成を強化するため、外国語学部を言語文化学部と国際社会学部の２学部に改編。新たなスタートを切る。

写真は、6ページからの
学長対談に登場いただいた
一橋大学の山内進学長

文・グローブヴォイス編集室
写真・青木倫紀

GLOBE Voice
2012 Number 5

2010年春に広報誌を創刊しました。タイトルは「GLOBE Voice」。「地球」と「声(=人)」という2つの言葉を合わせた造語です。東外大の使命は、「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。そのためには、さまざまな国の文化・歴史といった、背景を知ることが欠かせません。５号目となる今号は、外国語学部を改編し、全地球をカバーする研究教育拠点として生まれ変わる「新生・東京外国語大学」を特集で紹介しました。

Contents

地球社会とともに歩む ——3

学長対談 ——6
一橋大学長 山内進

卒業生からのメッセージ ——12

graduated active person
in society ——16
ノンフィクション作家 高橋秀実
脚本家 山岡潤平

person doing research ——18
小川英文／河合香吏／桑田光平

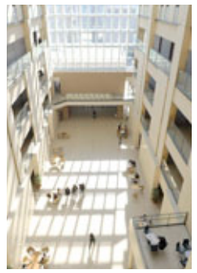
コラム「聴」——24
立石博高／今福龍太／深澤秀夫

歴史を刻む在学生 ——28
国際協力専攻1年 ラジェンドルデ・パイラッセム

News ——30

写真・市橋織江

全地球に対峙する



東京五輪や大阪万博などの
国際的なイベントのホスト国になり、
一気に高度経済成長を遂げた。
開催地周辺は、交通機関、道路などの
インフラ整備や、宿泊施設の建設が行われた。
国立競技場や日本武道館、東海道新幹線、
東京モノレールなどはこの時つくられた。

1853年（嘉永6）6月3日、ペリーが浦賀に来航し開国を要求したことで、江戸幕府は多くの外交文書を処理する必要に迫られた。天文方の「蘭書和解御用（らんしょわげごよう）」の人材を増強し緊急事態に対処したものの、人手が足りない。この事態を受けて、幕府の内部から、洋書翻訳、洋学研究および洋学者養成のための新たな機関を設立する機運が生まれる。

そこで誕生したのが、蕃書調所（ばんしょしらべしょ）、東外大の起源となる機関である。その後、明治維新による新政府が文部省を設置し、教育の中央集権化が始まる。こうした動きの中で、1873年（明治6）、東外大の前身である東京外国語学校が設立され、1949年（昭和24）の国立学校設置法により、東京外国語大学（外国語学部）が誕生。それから約半世紀後の2004年（平成16）、国立大学法人東京外国語大学として再スタートした。

近年、世界は情報通信技術が著しく発展し、グローバル化が急速に進展している。人と情報が行き交い、まったく新しい政治・経済・文化の諸現象が地球規模で生み出されているのだ。このような社会では、世界を日本と諸地域との関係の集積としてではなく、国際的、総合的に捉える研究教育体制が大学に求められている。

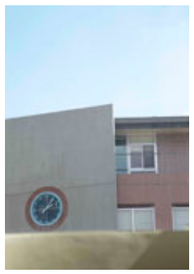
2012年4月、東京外国語大学は、これまでの外国語学部を「言語文化学部」と「国際社会学部」の2つの軸へと再構築する。東外大がカバーする学問領域は、語学教育はもちろんのこと、国際関係、経済学、思想や文化研究など多様な分野が総合的に組み合わさっている。今回の改編は、こうした特色を明確にし、世界の動向に対応したダイナミックなアプローチを実現しようとするものだ。これは、実は蕃書調所以来、一貫して受け継がれてきた東外大のスピリッツでもあるのだ。

（改編の概要は11ページ）

グローバル拠点へ

語学を軸に、文学、思想、文化研究、
国際経済、国際関係など、
多様な分野が
総合的に組み合わさった東外大の
学びで広がる可能性。
言語と文化で描く未来に、
明日への優しい光が射し込む。

ソ連崩壊による冷戦終結、
東西ドイツの統一、
アメリカ同時多発テロ、
リーマンショックによる金融危機など、
全世界の人々が時代の証人となった出来事。
歴史が動いた瞬間に、
新たなページが刻まれた。



Gaze
at
the
World

学長対談

世界に飛躍する人材を育てたい

法制史・法文化史の泰斗として知られ、『北の十字軍』でサントリー学芸賞を受賞。2010年、一橋大学長に就任した山内進さん。「歴史研究とは今を生きるための訓練」と語り、歴史家の視点で時代を見つめながら、世界を舞台に活躍する人材の育成に日夜腐心する。教育のグローバル化と秋入学について語り合った。

文・吉田燿子　写真・青木倫紀

亀山郁夫学長（以下、亀山）　山内さんが一橋大学の学長に就任されて1年が経ちました。今日は大学運営についていろいろお聞きしたいのですが、その前に、先生の研究のお話を伺えればと思います。ご専攻は歴史学ですが、現代における歴史学の有効性については、どのようにお考えですか。

歴史研究とは今を生きるための訓練

山内進学長（以下、山内）　二つあると思います。まず、現代とはまったく違う世界を認識することによって、今生きている世界の特質をあぶり出すことができる。これが一つ目です。

例えば、ヨーロッパ中世世界と現代を比較すると、暴力に対する感性や政治システムの違いが見てとれます。今は暴力が国家に集中されているので、それ以外の人間が暴力を振るうと捕まってしまいます。ところが、ヨーロッパ中世の封建社会では、暴力を持った人間が群雄割拠し、主権国家のように自立して、統治力を行使していたのです。ただし、古代・中世世界では、暴力統治をする理由は実に明快です。戦争とは自分の利益のために行うもので、相手のものを獲って自分の財産にすることが生計の手段だった。それが19世紀以降になると、戦争とは「国家のため」に行うものになった。考えてみれば変な話で、自分の財産を増やすためならともかく、なぜ国家のために戦わなければならないのか。今の国のあり方やシステムのほうが、実は特殊なのではないか――こうした認識が持てるということが、歴史研究の意義の一つだと思います。

もう一つは、歴史の連続性を知ることができるということです。歴史を研究するということは、今と過去とのつながりを知るということでもある。自分を相対化しながら、歴史の中で生きる自分をどう考えていくか。歴史を学ぶということは、自分の生き方を考えるための訓練になるわけです。

亀山　確かに、兵士は国家によって、不条理な戦争を強いられています。ベトナム戦争にしても、兵士たちはすさまじい後遺症に苦しめられている。しかし、中世においては、戦争とは自分自身の生命活動そのものだったわけですね。

山内進 氏

Susumu Yamauchi

一橋大学長

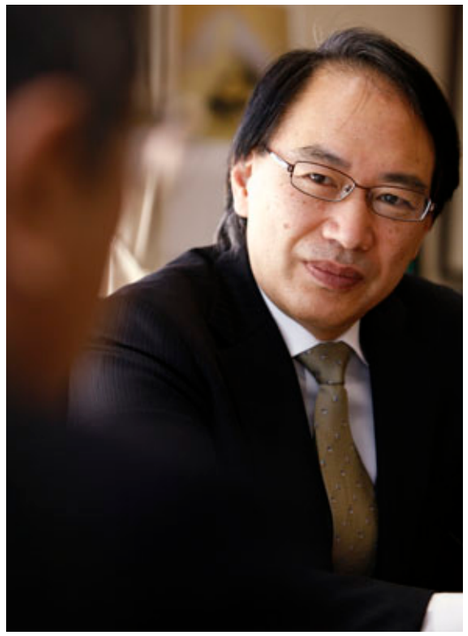
やまうち すすむ
1949年北海道生まれ。
72年、一橋大学法学部卒業。
77年同大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。
90年より一橋大学法学部教授。
2010年から現職。

海外に尖兵を送る東外大、日本に軸足を置く一橋大

亀山　話は変わりますが、これまでに東外大が輩出したグローバル人材の経歴を見ると、海外の現場で何年も実績を積み、そのノウハウや実績が評価されて企業の中枢に入っていく、というパターンが主流です。東外大の学生は4割が留学経験者ですが、企業の中核で評価されるというよりは、一匹狼で個人商店的にやっているところがある。東外大が送り出す人材は、いわば「尖兵」なんですね。大局的なことを考える人材というより、国際ビジネスや世界の地域の現場できちんと働ける人材を育てていく。それが、東外大が担うグローバル人材の姿ではないかと思います。

　それと比べると、一橋大には、日本の官僚機構や企業の中核を担う人材を育成する大学というイメージがあります。昨年4月に発表された「一橋大学プラン135」では、「スマートで強靭なグローバル一橋」というビジョンが掲げられています。この中で、「世界水準の教育」ということを謳っておられますね。今後の一橋大学のグローバル人材育成を、どのように実現したいとお考えですか。

山内　我々が考えるグローバル人材とは、「世界を見て、世界を相手に働く」ことのできる人です。そもそも、東外大とは語学力のレベルが違うし、語学に対する考え方も違う。東外大の皆さんは、言葉そのものが好きだという印象がありますが、一橋大の学生にとって言葉とは、社会で生きていくための武器にすぎない。一橋大の前身は商法講習所で、「世界と戦える商人を育てる」ためのビジネスクールとして作られた。ただし、基点はあくまでも日本であり、日本のため、自分の会社のために必要だから海外のことを学ぶ、というレベルなんです。



亀山　非常に面白いですね。つまり、「軸足を日本に置く」というのが、一橋スピリットの根幹に強烈にあるわけですね。それが東外大にはない。東外大の学生は、何よりもまず世界諸地域の言語、すなわちある意味で人間社会の根本でありながら、なおかつ実学とはほど遠い学問を学ぶわけです。それだけに、我々がグローバル時代に活躍できる人材をどれだけ育てられるかという点については、これまで若干の不安がありました。

　そこで、今回の学部改革では、外国語学部だけの1学部制から、言語文化学部と国際社会学部の2学部制に移行しました。言語文化学部を新設したのは、文化という言葉の「肉」の部分をしっかり学んでもらわないと、東外大が目指す個別地域的な人材すらも育たなくなるだろう、と考えたからです。アラビア語にせよベンガル語にせよ、言葉さえ学べば世界がわかるというものではない。大学として真のプロフェッショナルを育てていくために、かなり苦しい大学改革を断行したというのが実情です。

山内　2学部制にすることは、かなり前から考えられていたのですか。

亀山　実は1999年に、教授会で2学部化を決定しているのです。国立大学法人化の動きに伴い、根本的な改革の必要性が叫ばれ始め、半年ほど大学全体ですさまじい議論が行われました。その時に、私が2学部制を唱えました。

　東外大の教員として学生や研究者と接するうちに、国際社会で働ける人材や、人文科学を担える人材が本当にここで育つのか、と絶望感に駆られるようになりました。やはり、ある程度の動機を持って大学に来てもらわないと、人材は育たないのではないか。そのためにも、まずは我々自身が、育成したい人材をモデル化しなければならない。そう思って文部科学省に2学部案を出したのですが、そのときはうまくいかず……。

　2学部制は私の10年来の構想だったものですから、学長になると同時に改革議論を始めました。ただ、今回新たな地域言語にベンガル語を加えたことについては、多少の勇気が必要でした。バングラデシュは1億5000万弱の人口を抱え、日本との経済的なつながりも強まっています。我々がバングラデシュと日本とのパイプを作れば、いつかどこかで生きるのではないか。そんな思いで講座を新設しました。

山内　素晴らしいですよね。誰にでもできることではない。そもそも、学部を新設したというのがすごいことです。今まで、国立大学ではそれができなかったわけですから、突破口を開かれたわけです。日本の大学の戦後史の中でも、大きい意味があると思います。

亀山　ありがとうございます。ところで、一橋大学では教育のグローバル化の一環として、英語コミュニケーション能力の向上のためにどのような取り組みをしておられますか。

山内　一昨年から、ブリティッシュ・カウンシルと提携して英語教育に取り組んでいます。「読む・書く・聞く・話す」の4つをバランスよく身につけてもらうのが目的で、来年度からはコマ数も増やし、必修化しようと考えています。

　あとは、専門科目の中で英語による授業を増やすことと、海外研修のプログラムを充実させること。本学の同窓会組織「如水会」などの奨学金で、来年度は海外に1年間、学部で67人派遣する予定です。これ以外にも、スタンフォード大とモナシュ大、カリフォルニア大で4週間のサマープログラムを行っており、集中的に英語研修をしています。北京大学では中国語、バウハウス大学ではドイツ語のサマープログラムもあります。

亀山　今後、大学教育に中国語教育をどの程度採り入れていくかは、けっこう大きな問題ですよね。ところで、教育のグローバル化とも絡んでくる問題ですが、秋入学についてはどうお考えですか。

「東外大の学生は
企業の中核で評価される
というよりは、
一匹狼で個人商店的。
大局的なことを
考える人材というより、
国際ビジネスや
世界の地域の現場で
きちんと働ける
人材を育てていく」
——亀山

「一橋大の基点は
あくまでも日本、
日本のため、
自分の会社のために
必要だから
海外のことを学ぶ、
一橋大の学生にとって
言葉とは、
社会で生きていくための
武器にすぎない」
——山内

かめやま いくお
1949年生まれ。東京外国語大学長。ドストエフスキー関連の翻訳・研究や、ソ連・スターリン体制下の政治と芸術の関係をめぐる著書が多い。主なものには『ドストエフスキー父殺しの文学』、翻訳『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』ほか。

当面は春入学と秋入学の二段構えで

山内　すでに多くの国が秋入学で動いているのであれば、それに合わせたほうが、話が簡単です。日本の大学全体が秋入学に合わせるのがいいと思います。高校が変わらなければ、高校卒業と大学入学との間に当然ギャップが生じますが、僕自身は従来の4月入学もあり得ると思っています。その代わり、4～8月の間、大学で集中的に準備教育を行い、9月から正規のカリキュラムで学ぶ。そんな形も工夫できないかと考えています。

亀山　大学に在学する期間が4～5年になるわけですね。

山内　その辺はやり方次第で、4年ということもあり得ると思います。今は1年目は教養中心で、それから専門教育に移行していますが、1年目から専門教育も始めるようにすれば、取得単位数の問題は解消される。一橋大の場合、4年生の学部教育を9月から12月までに終え、残りの3カ月は違うことを学ぶという形にすれば、4年間で十分に卒業できる。考え方の問題だと思います。

亀山　高校卒業から大学入学までのギャップイヤーを、大学の責任からはずすかどうかで、かなり違ってきますよね。

山内　それはやはり、大学が責任を持ってやったほうがいいと思います。

亀山　そうですよね。そこが、今回の改革で我々が一番重視した点です。4月入学で、教養課程を2年目の半ばで終わら

せ、9月からは海外留学に行ってもらい、留学先で受けた授業を単位化できるようにする。この方法なら、3年目の9月に帰国して半年後には就職活動ができます。できるだけ海外留学が可能なシステムとして、3セメスターで終わらせる方法を採ったわけです。これで実質的に9月入学の意義を実現できたので、ギャップイヤーをどうするか考える必要はないのですが、いずれにせよ（4月入学と9月入学で）二段構えの方法を採る必要があるのではないかと考えています。

山内　私もそう思います。二段構えで準備を進め、秋入学そのものにも対応できるようにしておきたいですね。

亀山　最後にお聞きしたいのは、今後、一橋大学として世界大学ランキングを意識していくのか、それとも意識しないのかということです。と申しますのも、先日、北京外国語大学の創立60周年の記念式典に出席する機会がありまして。東外大の弟分みたいな大学だと思っていたら、とんでもない。なんとこれまでに、400人もの大使・総領事クラスを輩出しているというんです。ところが、そんな北京外国語大学でも、世界大学ランキングには載っていない。もともと、多言語多文化を扱う我々のような大学は、英語論文の数を問われる世界大学ランキングでは苦しい立場にある。しかし、一橋大学は社会科学系ですから、すべて英語で発信することができたら、相当インパクトがあるのではないのでしょうか。

山内　世界大学ランキングというのは、評価軸のとり方が理系基準ですよね。留学生比率や教員1人当たりの学生数なども問われるわけですが、そもそも文系と理系の大学とではずいぶんと差がある。

例えば、東京医科歯科大学では「学生4人に先生1人」の割合だそうです。一橋大学は20人に1人で、それだけでもう負けてしまう。教員の外国人比率や論文の引用件数など、さまざまな判定基準がありますが、英語で論文を書く習慣があるのは経済学ぐらいですから、今のところ厳しい。現状では、ランキングを上げる作戦としては、一橋の知名度を高めつつ、先生たちに、「できるだけ英語の論文を書いてもらう」ということになります。ただ、大学の分野別ランキングというのがありまして、QS社の社会科学系ランキングでは、一橋大学は世界で100位前後にいます。それでいいとは思っていませんが、これまで特にランキングを意識してこなかったことを思えば、そんなに悪いわけではない。

世界大学ランキングでは、どうしても英語圏の大学が上位にランクされる傾向にあります。トップ30まではアングロサクソン系が大半を占め、その後にヨーロッパの一流大学が出てくる。パリ第1大学は40位前後、フンボルト大学（旧ベルリン大学）は50位前後、ウィーン大学やハイデルベルク大学で90位前後で、ロシアの大学は出てこない。ヨーロッパの大学もけっこう苦労しているんです。100位前後にいれば海外の一流どころとはおつきあいできるレベルなので、これをキープしながら、さらに上を目指そうと思います。

亀山　日本はGDP3位に落ちたとはいえ、世界に冠たる国ですよね。なおかつ、教育システムも世界に冠たるものがあるはずです。日本が誇る一橋大学も、世界の中でもっと顔が見えるように頑張ってほしいと思いますし、我々もランキングを上げる努力をしていかなくてはいけないと思います。最後に、東外大への期待を一言いただけますか。

山内　東外大は明治以来、時代に対応しながら、優れた人材をたくさん輩出してきた大学です。今回、新たにベンガル語を加えられたように、東外大でなければできないことはたくさんある。これからの時代、外国語と地域についての知識を踏まえてグローバルに活躍できる人材がますます必要になってきます。そういう人材を、ぜひ育てていただきたいですね。

亀山　今日はお忙しい中、本当にありがとうございました。▼

東京外国語大学はこう変わる！

“国際教養人”と“国際職業人”を育成する新たな教育体制

東外大は、これまでの外国語学部を改編し「言語文化学部」と「国際社会学部」の2学部体制をスタートする。また、研究対象地域にアフリカ、オセアニア、中央アジアの3地域を加え、さらに新たな地域言語として南アジア地域にベンガル語が加わる。これにより全地球をカバーする教育体制が整うことになる。学生は、どちらの学部に入学しても最初の2年間は学部間共通カリキュラム「世界教養プログラム」で、選択した言語とその地域の基礎的な教養を学ぶ。学部後期では両学部それぞれ3つのコース、合計6コースにわかれて、特色を活かした専門領域について学んでいく。

全地球をカバーする14地域・27言語の教育体制

世界の言語・文化を学びたい
言語文化学部
世界諸地域の言語と文化に通じ、国際社会の舞台で活躍できる“国際教養人”を育てる。
《主な進路》
教育機関、ジャーナリスト、情報、語学、人材育成分野、通訳、グローバル企業、NGO、研究者

世界の地域・社会を学びたい
国際社会学部
世界諸地域の歴史や社会の仕組みに通じ、国際ビジネスで活躍できる“国際職業人”を育てる。
《主な進路》
国際機関、政府機関、NGO、グローバル企業、教育・研究機関

1年次	2年次	3年次	4年次

世界教養プログラム
14地域・27言語をカバー

言語	地域
英語	北西ヨーロッパ
ドイツ語	中央ヨーロッパ
ポーランド語	西南ヨーロッパ
チェコ語	ロシア
フランス語	北アメリカ
イタリア語	ラテンアメリカ
スペイン語	日本
ポルトガル語	東アジア
ロシア語	中央アジア
モンゴル語	東南アジア
日本語	南アジア
中国語	西アジア・北アフリカ
朝鮮語	アフリカ
インドネシア語	オセアニア
マレーシア語	
フィリピン語	
タイ語	
ラオス語	
ベトナム語	
カンボジア語	
ビルマ語	
ウルドゥー語	
ヒンディー語	
ベンガル語	
アラビア語	
ペルシア語	
トルコ語	

言語・情報コース
世界の諸地域の言語の構造および言語と社会・文化・人間心理などとの関係や言語情報処理などを学ぶ。

グローバルコミュニケーションコース
翻訳・通訳や言語教育などコミュニケーションやコーディネーションの実践について学ぶ。

総合文化コース
世界の諸地域の表象文化や文学の理解を深め、それを通して、人間の知的な営みについて学ぶ。

地域社会研究コース
世界諸地域の複雑な地域社会の仕組みや個別の地域について学ぶ。

現代世界論コース
世界諸地域にかかわる新たな知的枠組みを通じて現代的課題について学ぶ。

国際関係コース
世界諸地域の国際関係や国際機関の役割について学ぶ。

※「言語文化学部」では「言語」と「配属地域」が、国際社会学部では「地域」と「配属言語」が所属の単位となる。受験時に、「言語、配属地域」または「地域、配属言語」を選択する。

Gaze at the World

世界教養プログラム

グローバル化時代に生きる“地球市民”としての基礎的教養を身につけるための学部間共通プログラム。「地域言語科目」「地域基礎科目」「英語科目」「教養外国語科目」「学術リテラシー」「基礎演習」「世界教養科目」などのカテゴリーからなり、世界をリサーチするための基礎力、世界とコミュニケーションするための基礎力、世界の文化や現実を知るための基礎力、世界に発信するための基礎力、世界を考えるための基礎力を養うことを目指す。

卒業生にお聞きしました。

Q1:私にとっての外語大 Q2:『新生・　東京外国語大学』に期待すること

小菅 みさと
2001年ロシア語
●NHK国際放送局多言語展開部

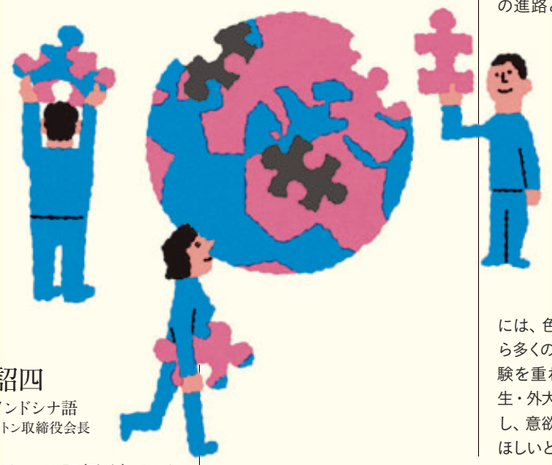
A1: 「なぜロシア語を選んだのか――」卒業して10年以上経った今でも質問される。「ロシア文学に感銘を受けた」「ロシアの政治情勢に興味がある」、そんな答えができたらどんなに良いかと何度も思ってきた。実際の志望動機はというと、「ロシアは大国で、世界でロシア語を話す人も多く、就職のときに役に立つかもしれない……」こんなものである。しかし、そんな軽い気持ちで選んだロシアにどっぷり浸ってしまっている。現在NHKでロシアに向けたロシア語放送を担当しているのだが、気がつけばロシアという専門分野を武器に道を切り開くことができている。東京外大の教育はそれだけ専門性が高く、自分の選択言語を将来のライフワークとすることも可能なのだ。これはまさに東京外大の持つ強みであり、魅力といえるだろう。

A2: 東京外大の卒業生には自由な国際人が多い。日本人としての誇りを持ちながらも、ステレオタイプな日本人像を打ち破る自由な発想と強い意志を持っている。さらに彼らは皆、鋭い嗅覚を持っている。「これは危ない」「今がチャンス」、そんな嗅覚は日本国内であれ海外であれ、どんな場面でも求められる。そしてその嗅覚を身につけることができるのは学生時代なのではないかと思う。しかし時に外国語の知識というのは、変に自尊心を高め、壁を作ってしまうこともある。私自身、ロシア語が話せるというだけでどんな会社でもすぐに活躍できると思っていた。外国語というのは、あくまでツールであることも忘れてはいけない。

入江和生
1969年大学院修士課程ゲルマン系
●共立女子大学／共立女子短期大学学長

A1: 今から半世紀前に、外語大に入学しました。その際、当時の学生部長の教授が、「諸君は、オールAの成績を取ろうなどと馬鹿なことを考えてはいけない。大学はそのようなところではない」と挨拶されました。私がこの教訓を、おそらく、学生部長の期待をはるかに上回るかたちで実践したことは確かです。私は柔道部と語劇サークルに所属し、それらの方面で猛烈に忙しく、あいまを縫って授業に出るような学生でした。ただ、家に帰ると毎日辞書を引きながらシェイクスピアを読み、それが「その後」につながることになりました。まったく論理的でありませんが、「大学とはそのようなところだ」という思いが、私にはあります。

A2: 今日、大学は、単位の実質化、職業教育の実践などを厳しく求められており、かつてのような大らかさが許されない時勢になっています。さらに、少子化のために大学間の競争が激化し、各大学は独自性を打ち出すためにしのぎを削っています。しかしながら、私は、大学とはどのようなところか、の答えを出すのは、大学ではなくて、学生一人ひとりであるとの思いを拭うことができません。その認識なしに制度や仕組みを変えても、うまくいかないように思います。私としては、かつての学生部長の教訓が、現在も外語大で引き継がれていることを祈るばかりです。



荒川詔四
1968年インドシナ語
●ブリヂストン取締役会長

A1: メジャー言語（欧米）ではなく、マイナー言語を選んだことで、結果的には、それまで生きてきた世界とは、大きく違った世界を発見し、また、自分の今まで積み上げてきたものをぐちゃぐちゃに壊されました。結果、自分自身の思考領域が拡張され、違う考えを受け入れ生かす工夫をする能力が醸成され、新たな能力を持つ自分が生まれたのだと思います。いわゆるDiversity（多様化）の重要性への理解力の醸成です。

A2: 外部から見ると、今までの1学部制は、実際の狙っているところと離れて、言語研究色があまりにも強く見えました。そのため、実社会では活躍の舞台が狭められている場面が多くあり、また、卒業生自身もこれを良しとするような風潮があったのではなかろうかと思います。2学部制にし、外部にも意思をはっきりわかり易くすることで、実社会で活躍したい者にとってこの“縛り”が解けるきっかけになるのではと大いに期待しています。

田丸公美子
1972年イタリア語
●イタリア語会議通訳、エッセイスト

A1: 6才にして通訳を志した私は、当然のように外語大を目指しました。当時の外語大は国立二期校、倍率15－16倍の難関で、学生の8割は男子でした。私が選んだのは、希少価値のあるイタリア語です。幸運なことに、在学中、大阪万博があり、学生アルバイトの身で法外な日当をいただき、イタリア人団体の観光ガイドを始めました。その経験を生かし、卒業後はイタリア語の同時通訳として今日までフリーで生きてきました。米原万里さんと親友になれたのも、国際会議で一緒に仕事をしたからで、人生最大の役得（？）でした。私は、運よく、日本の急速な国際化と外国語が話せる人が少なかったという2つの追い風に押されて順調にキャリアを重ねることができました。

A2: 「強制収容所みたい」とイタリア人の先生が酷評した旧西ヶ原校舎から、すっかりおしゃれに変身した母校。今回の学部改編で、教育内容も外観にふさわしく充実したようで、今後の後輩たちの活躍に期待が膨らみます。「はじめに言葉ありき」とヨハネ伝にあるように、言葉はすべての基本であり、それを使う民族の文化やメンタリティ、また世界観まで表すものです。真の国際人になるためには、まず自己のルーツとなる日本語を磨き、日本のことを知る必要があると思っています。外語大では、日本人の弱点である「話す」「聞く」を徹底的に訓練してほしいです。口頭試問、ディベートなどを取り入れるほか、通訳を養成する拠点としてもリーダー的な役割を果たすよう望んでいます。

原 ゆかり
2009年中国語
●外務省

A1: 私の学生生活は、専攻語とゼミ活動、課外活動などでとても充実したものでした。外大には、言語のみならず、世界各地の歴史や文化、法律や国際関係など、幅広い分野の授業が揃っています。また留学生も多く、例えば、紛争後の平和構築について、アフガニスタンやスーダンからの留学生と意見交換をする機会にも恵まれました。卒業後の進路として外務省を選ぶに至ったのは、外大で出会った仲間や教授の影響が大きかったように思います。

A2: 夢や目標の実現のために、自らの頭で考え、動く学生の育成を期待します。新しい発見の連続の中で、仲間と切磋琢磨しながら、やりたいことを追求し、得意なことを伸ばせるような環境が外大にはあると思います。学生には、色彩豊かな教授陣や仲間から多くの刺激を得ながら、知識や経験を重ねてほしいと思います。新生・外大には、学生の主体性を尊重し、意欲を育むような大学であってほしいと願っています。

井上正幸
1972年ウルドゥ語
●日本国際教育支援協会理事長

A1: 大学時代は社会や諸外国についての知的好奇心を開く大きな契機となった。東西交渉史、国際関係、経済、中東古代史、イスラム論、インドと英国の関係など幅広い分野である。外国旅行もたくさんした。百聞は一見に如かず。一つの言語を学ぶことはもう一つの別の世界を持てることにもつながる。

A2: 国際教養人、国際職業人を目指すことは言うは易く達成することは大事業である。今の世界はグローバリゼーションや情報化の名の下において一体化が進んでいるが、他方各地域、文化、言語、社会などは自らのアイデンティティーを主張している。大学の4年間でその両者の土台を体系として学ぶことは大変だが、言語文化、国際社会の両方において是非このような知的チャレンジに果敢に挑んでいくような学生になってほしいし育ててほしい。

田中一嘉
1991年大学院修士課程ゲルマン系
●群馬大学准教授

A1: 外国語習得の成否は学習の総量が大きく物を言うと信じます。手立てや方策を追いすぎず、できる限り多量かつ多種類の言語テクスト（音声・文字を問わず）にふれて、それにおぼれるくらいにひたってください。

A2: 外語大にしかできないことを果敢に追究してほしい。他大学にはない、言語そのものを深く追究するという姿勢を忘れることなく「グローバル化」と言われる現代でしたたかに生き残ってほしい。

和田昌親
1971年スペイン語
●元日本経済新聞社常務取締役

A1: 高校生の頃から新聞記者になると決めていたので、語学よりもひたすら日本語の本を濫読していた気がする。新聞社に入社したのも「語学を生かす」などという大それたことを考えたわけではない。ところが入社12年目に“事件”が起きた。「おい君、サンパウロ支局に行ってくれ」。人事異動の内示だ。ブラジルはポルトガル語だが、それに近いスペイン語ができる人間として選ばれたらしい。「スペイン語はほとんど忘れました」と言ってみたが後の祭り。実際「忘れた」と思っていたが、ある大事件の取材で頭の奥から記憶が蘇ってきた。1982年に勃発した「フォークランド戦争（英国とアルゼンチンの領土紛争）」である。ブエノスアイレスでは英語は敵国語なので記者発表はすべてスペイン語。これが不思議にわかるようになったのである。仕事だからと必死になったこともあるが、文法を比較的きちんと覚えていたことが「復活劇」につながったかなと思う。

A2: 日本は明治維新、太平洋戦争の敗戦に続き、3・11東日本大震災という「第三の国づくりの転機」に立つ。震災復興というハンディを背負って世界の中での存在感を取り戻すには、グローバル人材を育てる必要がある。その意味では今回の学部改編は絶好のタイミングだ。2学部共通の世界教養プログラムで外交やビジネスのための「人間力」や「交渉力」も備わるはずである。東京外語大の役割は「語学も留学も海外駐在も当たり前」と考える外向き・上向きの若者人材を発掘し教育すること。日本には「国際」と名のつく学部を持つ大学がワンサカとある。そういう中でも全世界、各地域をくまなくカバーする大学は東京外語大しかない。

中嶋嶺雄
1960年中国語
●国際教養大学理事長・学長

A1: 卒業時には、東京外大に対する不満で、二度とこの大学の門はくぐるまいと思っていましたが、運命のめぐり合わせで母校の教員となり、学長も務めることになりました。大学の3、4年次は学生運動に明け暮れており、就職活動は一切せずに、研究所から大学院へと進みました。深刻な学生紛争で体験した人間模様が社会に出て役立ちました。

A2: 外国語のコミュニケーション能力に秀で、国際教養を身につけたグローバル人材の養成が東京外大の使命であり役割です。それには、教職員の意識と体質がグローバル化を見つめて抜本的に改革されなければなりません。米国の民主政やヨーロッパ近代の遺産、それに日本の伝統や文化を軽々に否定するような教員集団が多いとすれば、東京外大の未来は厳しいと思います。亀山学長のリーダーシップで東京外大が新生することに期待します。

中村 恵
1983年フランス語
●国連UNHCR協会

A1: 東京外大では、さまざまな言語や地域に対して、同じ尊敬の念と好奇心を持って接する「平等感」が養われました。それが、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に勤務した10年間、さまざまな出身国の同僚たちとの出会いを楽しみ、難民問題が起きる地域の歴史や国際関係を深く理解しようと努める自分の姿勢の土台となっていたのではないかと思います。

A2: 東京外大には、日本だけでなく世界から一目置かれるような、言語と地域研究の教育拠点となってほしいです。学生には、言葉を使って世界各地の人々と対話ができる力量を養っていただきたいと思います。

桜井哲夫
1973年フランス語
●東京経済大学教授

A1: 1968年3月に東大の二次試験に失敗、予備校に通った。ところが翌年の東大入試は、安田講堂の攻防戦の後、中止と決まった。あれこれあったのだが、結局、当時愛読していたポール・ニザン『アデン・アラビア』の訳者だった篠田浩一郎先生のおられた外語大のフランス語科に入学することにした。私の外語大時代の前半は、学内での激論と学外でのデモの時代であった。しかし、今考えてみると、外語大時代の最大の幸運は、すぐれた先生たちに出会えたことだと思っている。恩師の篠田浩一郎先生、歴史学の二宮宏之先生、社会経済史、思想史の山之内靖先生らとの出会いは、決定的だった。当時国際基督教大学におられた丸山圭三郎先生との出会いもあった。モンゴル語科には、社会言語学者として著名になった田中克彦先生もおられた。その後東大の大学院に入り、研究者となったのも、こうした先生方から受けた知的刺激が大きかったように思う。

A2: 外語大の少人数教育には感謝している。入学当初からの学生と教員との相互関係の深さは、ほかの大学では得られなかっただろう。こうした伝統は存続してほしいものだ。だがその一方で、外語大の学生の多くは、あの騒乱の当時でさえ社会的・政治的問題に対して無関心だったように思う。かつて、専門バカという言葉があった。語学習得に熱意を持つのはいいのだが、それ以外のことに無関心ではいられないはずである。新しい学部が生まれるのもそうした時代の要請なのだろう。

卒業生にお聞きしました。

Q1:私にとっての外語大　Q2:『新生・東京外国語大学』に期待すること

柳沢香枝
1980年中国語
●JICA国際緊急援助隊事務局長

A1: 一つの国をさまざまな角度から見て全体像を理解する、これが東京外大で学んだことだ。就職後4年目に中国駐在となり、それまで「竹のカーテン」越しに見ていた中国社会の実態や中国人の考え方にふれ、驚きも大きかったが、学生時代に中国の歴史、政治、文学などを学び、中国と向き合って来なければ、現場での経験も単なる印象で終わってしまったかもしれない。JICA（国際協力機構）での仕事は一つの地域に偏ることなく、アフリカや中南米を担当することもある。そのような場合も自分がかかわる分野だけでその国を表面的に理解することはしないように努めている。その国が成立した歴史的背景や政治構造などを理解し、現場を見、その国の人と話して初めて有益なプロジェクトが構想できるからである。

A2: 「英語で考えたものを翻訳してもロシア語にはならない、最初からロシア語で考えなさい」。国連に出向していた時に受講していたロシア語クラスの講師から言われた言葉である。この言葉は言語というものの本質を表していると思う。言語はそれが話されている国や地域の文化や人々の考え方と分かちがたく結びついている。言語なくして国や地域を理解することはできない。さらに、日本語や英語に訳された2次情報と、オリジナルな言語から得られる1次情報では情報量が圧倒的に違う。東京外大は、世界のさまざまな地域や国の情報を直接得ることができ、深く理解できる人材を育てる正統な教育機関であってほしいと思う。他方、言語のユニバーサルな側面も無視することはできない。本来東京外大を目指す学生は語学に対する感度が高く、英語能力も平均以上に高いはずである。卒業後、「英語で研究ができる」、「英語で仕事ができる」レベルにすぐに達するだけの強い基礎を学生時代に築けるような教育もしていっていただきたい。

佐藤 悟
1977年スペイン語
●在スペイン大使

A1: 東京外大での、広く国際的な視野に立った授業や語学の勉強は、非常に役に立ちました。英語は国際語として必須である上、それ以外にもう一つの語学を習得することは大変な努力が必要です。さらに語学の先にある各地域や国の歴史・社会・文化についても理解を深めてほしいと思います。また、在学中の海外留学やインターンシップを活用した実社会での研修なども積極的に取り組むとよいのではないかと思います。

A2: 2学部体制の発足を心より歓迎します。これにより、言語文化に関心のある学生と政治・経済・地域研究などに関心のある学生のそれぞれのニーズに、より的確に応えることができるようになると思います。国際社会は、現在大きく変化しており、従来の欧米諸国主導の時代から、中国、インド、ブラジルなどの新興国が重要な存在感を示す時代になっています。これらの国々の言語を学習できる大学は日本国内でも限られており、東京外大は次代の国際人を養成するという意味で重要な役割が期待されています。

加藤千洋
1972年中国語
●同志社大学教授、元朝日新聞記者

A1: 私が入学した1960年代末は、全学ロックアウトで通学することもままならない状況でした。それでも書いておきたいのは、「学校にいなくてもよい」という絶好の環境を生かし、個人で、仲間で自主的な学習、研究にはげんだことです。これは新聞記者という職業を選んでからも大変役に立つ経験でした。具体的には友人2人と「人類学会」なる小さな同好会を立ち上げフィールドワークを実行しました。群馬県の山間のこんにゃく芋だけをつくる山村に通い、こんにゃく芋から見た人口100人に満たない小さな集落の生活史を記録しました。なんでそんなことを「外国語大学の学生が」と思われるでしょうが、私たちは外国語学習は「目的」ではなく、あくまで「手段」であると考えていました。

A2: 今、私は38年間の新聞記者生活を経て大学で教員をしています。同志社大学が2010年春に発足させた大学院のグローバル・スタディーズ研究科というところです。目指すは新生・東外大と同じです。言葉だけでなく異文化を理解する能力を身につけ、そして途上国の人々と共同作業に取り組み、リーダー格として活動できるような人材がますます必要になります。そうした「グローバル人材」を新生・東外大は生み出してほしいと思います。

山本 浩
1976年ドイツ語
●法政大学教授、元NHKアナウンサー

A1: 1972年入学当時、海外に対する憧れは現実への近さという点で今とは違ったありようでした。思わず知らず、身体の奥深くに埋め込むべきもう一つの背骨として、外国語を身のうちに取り込もうと思っていたような気がします。その背骨もいつしか幾分やせ細り、あちこちに椎間板が飛び出してしまいましたが、そうした確とした2本目の背骨を意識しながら学生生活を送っていけたのが、今となっては大きな財産だったと思っています。振り返れば4年間は、ほとんど毎日、オーケストラクラブに精魂を打ち込んだ生活でした。午前2時に裏門をよじ登って部室に入り、楽器を捨てて声であわせた交響曲。朝から晩までマウスピースを口にしていた夏の合宿。どれもこれも懐かしい思い出です。

A2: かつては自然に対してどのように振る舞うべきか、その仕組みを知り、どのように生きるべきかを身につけるのが教育の大切な要件でした。それがやがて金品に対してどう対処するのかを問われる時代になり、さらに進んでサービスに、そして今は時間と情報に対してどう対応すべきかを問われる世紀になっています。実生活の中で私たちが直接遭遇する人間の喜怒哀楽、願望や欲求のエネルギーはインターネットの情報とは違った角度で降り注がれてきます。画面や紙面で獲得した情報を武器に、現実世界の中で論理と感情の雨を体験する。そうした学生生活を、緩急のリズムをつけながら送ってほしいと思います。

いちのへ友里
2001年ロシア語
●フリーアナウンサー

A1: 「世界で働き、世界で遊びたい！」そう夢見ていた私が選んだ外語大は“ちいさな地球”でした。あの国に行かなければ出逢えない民族音楽や民族舞踊のサークル。その国を訪れなければ味わえない各国グルメに舌鼓の学園祭。キャンパスを歩くだけでいろんな国の言葉が聞こえ、いろんな国の人に出会える4年間の世界一周旅行でした。ハバロフスク地方と姉妹都市関係にある青森県に生まれた私は、ちょうど直行便が就航した年にロシア語科へ進学。そこには、手を伸ばせばどこまでも深められる“ちいさなロシア”が待っていました。女子アナならぬ“ロシアナ”としてロシア国営ラジオ「ロシアの声」日本語課アナウンサーとしてモスクワに赴任した時、今度はロシアという国の中に“ちいさな外語大”がありました。

A2: ラジオ・パーソナリティの魅力のひとつは、2つの大陸の間を満たす水のように、電波の上で自分というパーソナリティをうまく使って送り手と受け手とをつなぐこと。新生・外語大には、スペシャリストとしてひとつの大陸を築き上げるタイプだけでなく、幅広い分野で、さらに多くの人たちに、その大陸の魅力を上手にPRしていけるタイプに出逢えるよう期待しています。

寺田朗子
1975年フランス語
●国境なき子どもたち会長

A1: 卒業したら母校のフランス語教師になる夢を持っていた私には一番入学したい大学だった。その後は目指していた教師にはなりそびれたが、卒業して20年近く過ぎてから同窓会にかかわる機会を得て初めて、この学校の魅力を知った気がする。一世代上の先輩との交流で、海外のさまざまな地域で英語のみならず現地の言葉をも使えるということが、どれだけその地域の人々との距離を縮めることになるのか、しみじみと悟ったのだ。知識として知るその国と、直接ふれ合って知るその国。外語大とは人のつながりに必要な素晴らしい道具を与えてくれるところだと思っている。

A2: 学んだ言語を道具にさまざまな地域の文化や社会経済などで活躍できる独特の大学のカラーが、さらに大きな視点ときめ細かい学習で日本を含めた世界を、より深く学べる素晴らしいシステムになってゆくと感じている。外語大はまさにこれからの世の中に求められる人材を輩出できるのでは、と胸がわくわくする。

鈴木敬一
1959年ロシヤ語
●築地魚市場取締役会長

A1: 友達とのおしゃべりに、授業より何より刺激を受け、啓発され勉強になりました。大学時代は、あまり背伸びや高望みをせずに、基礎的なことをきっちり身につけることが大事です。何事においても深く究めて、その知識を活用できるようになるには学生時代の2、3年ではとても無理でしょう。卒業後にじっくり時間をかけて探求するのです。

A2: 国際人となるべき人材の養成を期待します。語学の習得だけにこだわらず、対象国の歴史、文化、民族、社会、経済などを幅広く勉強し、その国の基礎知見を習得すること。それが、国際人の基本的な条件です。また、日本人としての矜持、日本語の読み書き、対話がきちんとできた上で、外国語の能力が付加されることが望ましいと思います。

永武ひかる
1981年ポルトガル・ブラジル語
●写真家

A1: 可能なかぎり、海外留学やボランティア、インターンシップなどを経験し、それを学問に活かし、早いうちから将来のビジョンを持てたらよいと思う。

A2: 異なる文化や社会をつなぎ、世界の平和に貢献するような人、またはそのような意思や思考を育む大学であってほしい。

加藤美保子
2001年ロシア語
●スラブ研究センター ITP第4期フェロー

A1: 高校時代に姉妹都市交流でアメリカに行った時、日本人が知らず知らずにアメリカから受けてきた影響の大きさを知り、まったく違う価値観に基づいて動いている世界を知りたかった、という理由でロシア語科に進みました。卒業して10年以上経ちますがいまだに興味の尽きない研究対象です。特に、過去20年間の国際システムにおける復活の過程を追っていると、「ロシア人」の根気強さや複雑な自己認識に引き付けられてしまいます。学生のみなさんにはできるだけ早い時期に自分の眼で自分の勉強している国を訪れてみることをお勧めします。

A2: 国籍や言語の壁を超えて人の心を摑むのは、より多くの人が前向きで生産的だと感じられる「アイディア」だと思います。日本を出て何かをしようとする時、必ずそこには人がいて彼らの協力が必要になります。そして逆に彼らは自分を通して日本を知ることになる。課題に直面した時、より良い未来に向かう「アイディア」を出して、どこにいても味方を増やしていける人材を育てることを東京外大に期待します。

山田智子
2004年ロシア語
●テレビ／ラジオ番組ディレクター

A1: 高校までと違って大学は個々が自立する場になります。留学先や卒業後の進路について「型にはまってもいいし、はまらなくてもいい」という広い視野を持って考えられたのは大学の環境のおかげだと思います。卒業して6年、私たちも社会人になり、企業に勤める同級生は駐在ラッシュ。でも卒業生の仲間にはカメラマンになった人、研究を続けている人、家具を作る人もいます。私たちはそれぞれが選んだ道を尊重しています。世界が身近に感じられるように育った私たちは今、「地球に住んでいる」という感覚があります。この感覚を、「グローバル人材」と言うのならば、東京外大にはその環境が伝統的にある大学だと思います。

A2: 世界中の文化を学び、それを意見交換できる環境をたくさん作ってほしい。専門研究とかけ離れた授業でも、さらに積極的に参加してもらう仕組みが豊かな人間を作ると思います。しかしサラリーマン養成学校のようにはなってほしくはありません。今の日本企業が大学に求めているのは「会社ですぐに使える人材」のようですが、そこに焦点を当てた大学生活はもったいない。会社に勤め始めたら「無駄な知識／趣味」と言われそうなことでも掘り下げられる授業が東京外大にはあります。学生時代にいかに多くの分野を掘り下げ、意見を持って伝えたかで、10年、20年後の人の柔軟性に差が出るはずです。さらに磨きをかけた大学になってほしいと思います。

桑原道夫
1972年スペイン語
●ダイエー代表取締役社長

A1: 学生運動によるストライキがあり、実質3年弱しか教室での勉学は行えませんでした。ストライキの期間、人生、人間社会、政治などいろいろな視点で先生や友人たちと語り合えたことは、今振り返っても決して無駄にはなっていないと思う一方で、現在のキャンパスでフルに4年間学べる環境にある学生は羨ましいと思います。

A2: 「新生・東京外大」が「言語文化学部」と「国際社会学部」の2学部制に改編され新たにスタートすることは、地球規模での課題を解決していかねばならない現在において、正に時宜を得た改編であると同時に、それだけ社会からの期待感も大きいことであり、是非大きく羽ばたいていって頂きたいと思います。

村中大祐
1990年ドイツ語
●指揮者

A1: 音楽家になるためドイツ語を選んだのが外大入学の理由ですが、当時は指揮者ではなくピアニストを目指していました。職業を選んだ理由をよく訊かれますが、この質問に厳密な意味で答えられる人などいるでしょうか。ほとんど運命とでもいったようなものです。強いて言うなら、音楽を「表現する」ことの神秘性、未知の可能性に、自分がのめり込み、解き明かしたいものがあったのでしょう。

A2: 外大とご縁ができると、「言葉」はある意味一生の課題となります。外国語ではなく、「言葉」という意味は、そこに日本語も含まれるからです。外国語とかかわることは、実は母国語、そしてあなたがもし日本人なら、「日本」そのものを、あなた個人の手でもう一度検証することになります。大学の役割とは、個々人がそれぞれの「自分」と向き合う環境を整えることかもしれません。

graduated active person in society_01

自分につながる歴史をたどって

髙橋秀実

ノンフィクション作家

『ご先祖様はどちら様』で第10回小林秀雄賞を受賞。丹念な取材と軽妙な語り口で、読者を引き込むノンフィクション作家の髙橋秀実さん。「大学に行くなら予想のできないことがしたい」とモンゴル語を選んだ。授業はほどほどに、ラグビーや柔道、8㎜映画の撮影など、興味のあることに励んだ。そして、当時首狩り族が住むといわれていたボルネオ島探険を思い立つ。壮行会の席で、担当教員の蓮見治雄先生がこう言った。

「君は身の回りのことを知っているか。もし知らないのなら、遠くに行っても何もわからないよ」

壮挙を控え、気分が最高潮に達したところで、まさかの一刺し。この一言は、後年、髙橋さんの人生を深く方向づけることになる。

ボルネオ島では陸ダヤク族の集落に滞在し、宗教儀礼や生活慣習を聞き取り調査。酋長からは娘との結婚を勧められたというからよほど気に入られたのだろう。帰国の途、テレビ関係者と知り合い、「ドキュメンタリー番組を作りたい」と思うように。卒業後はテレビ番組の制作会社に就職したが、仕事はバラエティー番組が中心で、ドキュメンタリーの企画を出してもボツを繰り返す。ならば「企画書を原稿にしたほうが早い」と考え、編集プロダクションに転職するも半年で会社が解散。以後フリーのライターとして数々のノンフィクション作品を発表していった。

冒頭の『ご先祖様はどちら様』は、自身の先祖調査の一部始終をユーモアたっぷりに描いた作品だ。

「3代前の先祖がどんな人生を送っていたかも知らないのに、日本の歴史が語れるはずもない。歴史の記録をたどるよりも、親や祖父母の話を聞いて『自分の中に生きる歴史』を感じるほうが、はるかに大事だと思います」

そんな〝髙橋史観〟の誕生に一役買ったのが、蓮見先生の苦言だったことは言うまでもない。

「大学時代は、何が将来役立つかと考えるより、自分ができると思うことをどんどん試せばいい。そうしないと、『本当はこんなことができたはずなのに』というオトナになってしまいますから」▼

ボルネオ島で滞在した集落、陸ダヤク族の子どもたちと。

たかはし ひでみね

1961年横浜市生まれ。83年東京外国語大学モンゴル語学科卒業。テレビ番組制作会社のADを経て、ノンフィクション作家となる。著書に『TOKYO外国人裁判』『にせニッポン人探訪記』『からくり民主主義』『トラウマの国ニッポン』『やせれば美人』『趣味は何ですか?』『R25』での連載をまとめた『結論はまた来週』など。

graduated active person in society_02

人間がもがく哀しさを表現したい

山岡潤平

脚本家

「脚本を書く際に、設定にひと工夫入れるのが好きです。僕が大事にしているのは、笑いと哀愁。人間がもがく哀しさをコメディーで表現したい」

そう語るのは新進脚本家・山岡潤平さん。好きな脚本家はチャーリー・カウフマン。映画『マルコヴィッチの穴』など奇想天外なストーリーで知られる異能の作家だ。

高校時代に見たフランス映画『奇人たちの晩餐会』に「めっちゃ衝撃を受けた」のが、東外大でフランス語を専攻した理由の一つだという。

入学後は演劇部に所属。役者を目指して芝居の稽古に明け暮れるうち、自分でも脚本を書くように。外語祭の語劇ではオリジナルの脚本でミステリーを上演した。

「これがフランス人の先生にめっちゃ受けまして。絶対にフランス人を笑わせてやろうと思って書いたので……成功したかな」

脚本家デビューは大学4年目の時。俳優・西村雅彦のラジオ番組の脚本に応募し、見事採用されたのだ。「自分の作品が形になる」喜びを知った山岡さんは、就職した会社を1年足らずで辞め、脚本家という〝けもの道〟に踏み込むことを決意。足を棒にしてテレビ局や制作会社を回り、売り込みを続けた。

「作品を持参して制作会社のビルの下まで行き、『今、下にいるんですけど、会ってもらえませんか』と。その繰り返しでしたね」

地道な努力が実り、子どもの頃から大好きだった『世にも奇妙な物語』(フジテレビ系列)の脚本に参加するという、願ってもないチャンスが舞い込んだ。2008年、ついにテレビドラマ・デビュー。今は共同脚本の仕事が多いが、「いずれは1本のシリーズを1人で書き上げたい」と夢を語る。

「外語大の長所は、個性的な人たちと出会えること。言語に興味がある人は〝人間〟に興味がある人が多いし、外国人とふれ合う機会も多いので、いろいろな考え方や文化を知ることができる。外語大の4年間で人間を描く上での引き出しをたくさん作れたと思います」▼

在学中に訪れたフランスでは現地の人の温かさを知った。

やまおか じゅんぺい

1983年兵庫県生まれ。東京外国語大学外国語学部でフランス語を専攻し、2004年に卒業。在学中にTOKYO FM西村雅彦のラジオドラマ『道草』に採用されデビューを飾る。『世にも奇妙な物語　2008春の特別編』(2008年フジテレビ系列)の「さっきよりもいい人」でドラマ脚本家デビュー。

person doing research

1

先史時代に新しい光を照射する

Interview with Hidefumi Ogawa

日本考古学の研究者は約8000人を数え、全世界の考古学者の半分を占める。遺跡を発掘して遺物の時代や性格を調べ、当時の状態を復元する――そんな伝統的考古学の分野では、日本は世界最高峰のレベルにあるといえる。

「国中の遺跡の相対編年[注]がわかっているのは、世界広しといえども日本だけ。しかし、どれほど発掘調査をしても、石器や土器の背景にある社会のことまでは、なかなかわからないのが現実です」

こうした伝統的考古学の限界を打破するため、1960年代以降、米国を中心にニューアーケオロジー（プロセス考古学）が台頭。その一派として、民族学・人類学と考古学を融合させた「民族考古学」が生まれた。

民族考古学とは、今も伝統文化の中で生きる人々の社会を調査し、古代から続く基層文化を探る考古学的手法である。小川英文氏もまた、民族考古学調査を実践する数少ない日本人研究者の1人だ。

「新しい考古学」に魅せられて

小川氏が考古学者を志したのは、小学4年の頃。古代トロイア遺跡を発掘したシュリーマンの伝記を読んだのがきっかけだった。慶應大学では〝花の仏文〟を専攻。しかし考古学への思いは断ちがたく、卒業後は世田谷の発掘現場に住み込みながら、早稲田大学の夜間で考古学を学んだ。

アグタの集落で調査した2週間を過ごした小屋

早稲田大学の大学院では東南アジアの考古学を専攻し、故・西村正衛教授に師事。西村ゼミはニューアーケオロジーの影響を受け、「新しい考古学を実践しよう」という機運に満ちていた。小川氏は大学院在学中の82年から、フィリピンでフィールドワークを開始。フィリピン国立博物館の協力を得て、北部ルソン島カガヤン川流域の洞穴遺跡で出土した、石器の機能と製作技術の分析を行った。

「日本では石器の形からある程度機能が類推できるのですが、フィリピンの石器は不定形で、機能がよくわからない。そこで、顕微鏡で刃の使用痕分析を行ったところ、『切る』『削る』の二つの機能しかないことがわかったのです」

ここでは、竹や木の蔓（つる）などの植物が道具として利用され、石器は「道具を作るための道具」として使われていたのではないか。

そう予測した小川氏は、洞穴遺跡近くに住む狩猟採集民アグタに注目。その集落に住み込み、いよいよ民族考古学調査に着手する。

「出土品をいくら調べても、当時の社会のことはなかなかわからない。今も自然の中で暮らす狩猟採集民を観察すれば、過去を類推するためのヒントが得られるのではないか、と考えたのです」

現地で調査を続けるうちに、面白い事実がわかってきた。アグタの集落には、低地から農耕民が頻繁にやって来る。そして、農作物や現金、散弾銃の弾などと引き換えに、イノシシやシカを獲ってきてくれるよう頼むのである。

「村に住んでいると不足しがちな肉などのたんぱく源も、山に行けば、狩猟採集民からもらうことができる。そして、狩猟採集民は農耕民から農作物や情報を入手できる。お互いが生きるための資源となっている様子を、間近に見ることができたのです」

農耕社会が到来し、近代国家が成立した今も、フィリピンではなぜ狩猟採集社会が連綿と生き残っているのか。その謎を、小川氏は考古学の立場から明らかにしようと考えた。そのためには、なるべく広範囲に遺跡の変化を調べなければならない。そこで、85年から88年にかけて、カガヤン川下流域50km四方を対象に調査を開始。ラロ貝塚遺跡を中心に、地域的な編年作業を進めるかたわら、付近の洞穴遺跡の調査もあわせて行った。

「おそらく、狩猟採集民が農耕民に重要なサービスを提供する存在だったがゆえに、狩猟採集社会は存続できたのではないか。もしかすると日本でも、縄文から弥生への移行期には、このような狩猟採集民と農耕民の交流があったのかもしれません」

ラロ貝塚遺跡を中心に、付近の洞穴遺跡の調査も行った。

フィリピンで感じた「被奪感」という痛み

民族学と考古学、そして東南アジア先史時代と縄文時代――小川氏の研究は、地域や学問領域の枠を超えて、ますますグローバルな広がりを見せていった。だが、それと同時に、考古学に内在するナショナリズムの問題にも突き当たることになる。

82年に初めてフィリピンを訪問して以来、小川氏はブルドーザーのような勢いで論文を量産した。その精力的な研究活動が、思わぬ波紋を広げてしまったのだ。

「ある時考古学の国際会議で、会長が僕のフィリピンの先生に『ヒデ・オガワって誰だ？』と聞いたらしいんです。先生は思わぬところで、外国人である僕の名前を聞かされ、不快に思ったのでしょう。『誰の許しを得て、この論文を発表したんだ』ということになってしまったんです」

外国人が、潤沢な調査費用を投じて、自国の遺跡を発掘していた。それは、金の力による学問的業績の収奪とも受け取られたのだろう。過去にさかのぼれば、フィリピンは第二次世界大戦中、日本の植民地として収奪された歴史を持っている。その「被奪感」が今も根強く残っていることを、小川氏は深く思い知らされた。

「一生懸命学問すれば、必ず道は開けると信じてきましたが、『僕が一生懸命やればやるほど、フィリピンの人々が悲しむ』という問題に直面しました。フィリピンの人々の感情を理解していなかったことに気づき、非常に苦しみました」

この反省のもと、95年からは、可能なかぎりフィリピンの人々に協力を求め、Win-Winの関係が築けるよう心を砕いた。それが人生における大きな転機となった、と小川氏は振り返る。

「研究はまだ緒についたばかり。狩猟採集民と農耕民との関係が、どのような社会的・経済的関係に及んでいたのか。さまざまな仮説を立て、発掘によってそれを検証していかなくてはなりません」

そう意気込みを語る小川氏。先史時代に新しい光を照射し続ける原動力は、既存の枠組みにとらわれない知への情熱である。▼

発掘後の作業に欠かせない、独ロットリング社のペン。発掘物を鉛筆で復元し、トレーシングペーパーの上からペンでなぞる。

小川英文 教授

総合国際学研究院・国際社会部門

おがわ・ひでふみ
1979年慶應義塾大学文学部仏文科卒業、81年早稲田大学第二文学部東洋文化学科卒業。88年早稲田大学大学院文学研究科考古学専攻博士後期課程中退。国士舘大学教養部講師・同助教授を経て、94年東京外国語大学外国語学部講師に就任。同助教授・教授を経て、2009年から現職。

遺跡から出土した遺物は、実際にはどのように使われていたのか。それを知るためには、遺物そのものを研究するだけでなく、当時の社会のありようまで探らなければならない。この信念のもと、小川英文氏はフィリピンで民族考古学調査を実施。その研究は、従来の考古学の枠組みを超えて、グローバルな広がりを見せている。

文・吉田燿子　写真・山崎亜沙子

注・出土した遺物がどの順番で製作されたのかという、相対的な前後関係。

person doing research

2

ヒトとサルの両面から進化の謎に迫る

Interview with Kaori Kawai

かわい・かおり
1985年北海道大学文学部行動科学科卒業、94年京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了（理学博士）。97年に静岡大学人文学部（文化人類学）助教授に就任、2002年から現職。

河合香吏 准教授

アジア・アフリカ言語文化研究所

人類は約600万〜700万年前まで大型類人猿とともに進化の過程をたどってきた。その社会性の基盤は、どのようなプロセスを歩んできたのか。それを解明するためには、人類学と霊長類学の共同作業が欠かせない。そこでヒトとサルの両面から人類進化の謎に取り組んでいるのが、河合氏だ。学問領域の枠を超えた知の結集により、人類史の新しいページが開かれようとしている。

文・吉田爆子　写真・山崎亜沙子

約2万年前に絶滅したネアンデルタール人には弔いのため、死者に花を手向ける習慣があった――この仮説が世界中に衝撃を与えたのは、今から60年前。ネアンデルタール人の遺骨の周辺から、おびただしい量の花粉が発掘されたのがきっかけだった。その後、こうした花粉の集積が自然状態でも起こることが証明され、この仮説には疑問符がつけられることとなる。ヒトの進化を考古学的に跡づけることの難しさを、浮き彫りにした一件であった。

「人類社会の進化を化石から推察するにはあまりにも情報が少ない。なぜ人類が霊長類の中でも特異的な進化を遂げてきたのか。それを知るためには、人類の中でも自然により強く依存して生活する人々と、現生の霊長類とを比較することがきわめて重要だと思います」

そう語るのは、人類学者の河合香吏氏だ。研究フィールドは、東アフリカ牧畜民。人類の社会と社会性のありようについて、進化史的基盤という視点から考え続けてきた。

アフリカの大地で牧畜民を研究

河合氏が人類学の下位区分の一つである「生態人類学」と出合ったのは、中学3年の時。日本でこの学問分野を確立した伊谷純一郎の著書『ゴリラとピグミーの森』（岩波書店）を読んだのがきっかけだった。「北方の騎馬民族の研究がしたい」と考え、北海道大学文学部に進学。生態人類学と動物行動学を学び、北海道・焼尻島におけるヒツジの放牧を「人―家畜関係」に着目して卒論をまとめた。その後、京都大学大学院理学研究科に進学。伊谷教授を指導教官とする人類進化論研究室で、東アフリカ牧畜民の研究に取り組むこととなった。

「生態人類学とは、ヒトが何を食べ、どんな環境で生き、どのような社会構造を形成しているかといった人々の『生きざま』を研究する学問。研究室には、主にアフリカの狩猟採集民や牧畜民、焼き畑農耕民の社会を研究する〝ヒト屋〟と、現生霊長類の社会を研究する〝サル屋〟がいました。ヒト屋とサル屋が一緒になって、人類社会の進化を明らかにするための研究に取り組んでいたのです」

河合氏にアフリカ行きのチャンスが舞い込んだのは、大学院に進学して間もない頃。たまたま北ケニア牧畜民調査隊に欠員が出て、修士課程1年目から参加できることになったのだ。1年に7カ月ずつ2度にわたり、ケニアでフィールドワークを実施。その後、講談社の奨学金を得て、1990〜92年の2年間、ケニアで調査を行った。

これらの調査を通じて、河合氏は人々が「身体について語ることを好む」ことに気づく。彼らは病院をほとんど利用せず、薬草や樹木の根を煎じて飲み、温湿布や瀉血（しゃけつ）などの民間医療を行っていた。

「彼らの身体に対する見方は即物的です。例えば、頭痛のことを、『側頭部の血管に大量の血が流れ込み、飛び跳ねている』と表現します。頭痛を治す時は、まず頭をギュッと縛って『飛び跳ねる血』を抑え、それでも治らなければ、こめかみにナイフを入れて瀉血をする。余分な血を体外に出すことで、頭痛を治そうと試みるのです」

人々が自らの身体をどう認識し、どのような治療を実践するのか――河合氏は研究成果をまとめて、94年に博士論文を発表。その内容をもとに、98年に『野の医療―牧畜民チャムスの身体世界』（東京大学出版会）を出版した。その後は、ウガンダ北東部にフィールドを移して調査を続けた。ここで、牧畜民の「家畜の略奪合戦」を目の当たりにし、現在の研究につながる重要な示唆を得ることとなる。

ウガンダ北東部の牧畜民は異なる民族集団が家畜の略奪合戦を繰り広げることで知られている。だが、敵味方が「宿命」としてはっきりと分かれるスーダン南部（現・南スーダン）などの牧畜民と比べると、ウガンダでは敵味方の境界が曖昧である点に特徴があるという。

フィールドに出ると、気候の違いやテント生活、道路事情の悪さなどに苦労はするが、慣れれば特に不便はない。

「ウガンダでは、異なる民族集団同士が、常に牛の取り合いをしているわけではありません。平和な時には仲間の関係になり、友達同士で牛を贈り合ったり、交換したりしていることがわかってきたのです」

初期人類の社会は一夫一妻の父系社会？

同じ集団が、時と場合に応じて、敵にもなれば味方にもなる。集団同士の関係がこれほど変幻自在だとすれば、「集団」とは一体何なのか。ここには、集団の本質にかかわる問題が秘められている――。

そう直観した河合氏は、ヒトとサルとを進化史の観点から研究することで、より根源的な問題を明らかにできるのではないかと考えた。こうして2005年にスタートしたのが、アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究プロジェクト「人類社会の進化史的基盤研究」だ。

旗振り役の河合氏のもとに、生態人類学や霊長類学、文化・社会人類学の研究者が結集。05〜08年に第1弾として「集団」、08〜11年に第2弾として「制度」の共同研究が行われてきた。

「伊谷先生たちの長期に及ぶ研究から、チンパンジーやボノボは父系の、ニホンザルは母系の社会構造を持っていることがわかっています。霊長類社会が父系と母系に分かれて進化したとすれば、人間の家族はどちらの系統から生まれたのか。研究を進めるうちに、人間の社会は父系の複雄複雌群をつくるチンパンジーなどの社会と類似していることが判明。オスとメスの配偶関係には一夫一妻、一夫多妻、一妻多夫といったパターンがありますが、ブッシュマンなどの狩猟採集民の社会はほとんどが一夫一妻。人間の社会は父系の系統から出てチンパンジー型の複雄複雌の群れの中に一夫一妻の『家族』が析出した可能性が高いことが明らかになってきたのです」

2012年度からは第3弾として「他者」をテーマとした共同研究が始まる。このほか、現代的課題に直面する東アフリカ牧畜民の民族史や身体性の問題についても研究を深めたい、と抱負を語る。

「大事なことは『自分の頭で考えること』。海外の議論を意識することは必要なことですが、それに乗って論文を仕上げるのではなく、まずはフィールドノートをにらんで考え、独自の理論を立ち上げていけたらいいですね」

自分の感性を大切にして、フィールドと対峙すること。その絶えざる作業こそが、人間の本質に至る唯一の解なのかもしれない。▼

フィールドで欠かせないノート。とにかく何でもメモをとる。帰国後はこのノートをにらみながら自分の理論を固めていく。

アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究の成果は書籍としてまとめられている。

person doing research

3

ロラン・バルトをめぐる知の冒険

Interview with Kuwada Kohei

桑田光平 講師

大学院総合国際学研究院・言語文化部門

くわだ・こうへい
1999年東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業、2001年同大学院人文社会系研究科フランス語フランス文学専攻修士課程修了。07年パリ第8大学造形芸術学科で修士号を、09年パリ第4大学フランス文学科で博士号を取得、同年10月から現職。

20世紀フランスを代表する思想家、ロラン・バルト。この「知の巨人」を中心に、20世紀フランス文学と芸術の研究に取り組んでいるのが、桑田光平氏だ。幅広い関心と融通無碍な研究スタイルで、既存の枠組みを軽々と飛び越え、バルト顔負けの自在なフットワークで、知の領域を縦横無尽に駆けめぐる。

文・吉田燿子　写真・山崎亜沙子

20世紀を代表する知の巨人、ロラン・バルト。文学やファッション、建築、写真、広告など、文化的・社会的な現象全般を縦横無尽に論じた批評家である。桑田光平氏は、このバルトを中心に、20世紀フランス文学と芸術の関係について研究している。

「ロラン・バルトを中心とする現代フランス文学・文芸批評、フランス現代詩と造形芸術の関係、写真論という3つのテーマで研究しています」

フランス文化を五感で吸収したパリ留学時代

高校時代にシェイクスピアなどの文学に開眼し、理系から文系に転向。東大進学後は英文学を専攻したが、「自分が生きている時代を知りたい」との思いが募り、20世紀現代文学、特にサルトルやカミュに傾倒するようになる。

「サルトルやカミュの文学は、安易に生きる意味や根拠を求めず、『たまたま生まれてきて、今ここに生きている』という感覚を肯定する。人生とは何かをウエットに問わない点に、強くひかれたのです。その延長線上にいたのがロラン・バルトでした」

学部在学中に英文学から仏文学に転向し、大学院ではロラン・バルトを専攻。2001年に修士課程を終えると、リヨンの協定校エコール・ノルマルに1年間留学した。エコール・ノルマルとはフランスの中枢を担うエリート人材の養成機関で、いわゆる「グランゼコール」の一つ。寮ではフランス人や米国人とルームシェアし、フランス語漬けの生活を送った。

「最初の2、3カ月は、相手が何を言っているかまったくわからない状態でした。でも、フランスでは黙っていると『存在しない』ことになってしまい、周囲から声が掛からなくなる。そこで、体で笑いをとったり、芝居に参加したりしながら存在をアピールしました」

留学生といえども、フランス人の「議論好き」の洗礼から逃れることはできない。フォークの使い方から、飲み物を飲む時に音を立てる習慣まで、森羅万象が議論のテーマになる。そんな日常にどっぷり浸かりながら、五感を全開にしてフランスの文化を吸収した。

「フランス文化の特徴は、誰にでも当てはまる『普遍性』を追求する点にある。つまり、『人は人、十人十色でいいじゃない』という相対主義とは対極にあるわけです。フランス人は『好みの違い』で話を終わらせず、互いの接点をなんとかして見つけようとする。それも、彼らが議論好きな理由の一つといえます」

帰国後、フランス政府給費留学生として03年12月に再び渡仏。二重登録制度を利用し、パリ第4大学で仏文学を、パリ第8大学で造形芸術を学んだ。ちなみに、フランスは日本以上に武道がさかんなお国柄でもある。桑田氏は博士論文に取り組むかたわら、道場に通ってマーシャルアーツを実践。大学では言葉と格闘し、道場では生身の相手と格闘する日々を送った。美術について造詣を深め、身体感覚を磨いたパリでの経験は、後の研究に大きく寄与することとなる。

転機が訪れたのは、留学生活が3年目を迎えた頃のことだった。パリ滞在中に日本人女性と結婚し、子どもを授かったのだ。だが、慣れない異郷で、研究と子育てを両立させるのは容易ではない。桑田氏はストレスで体調を崩し、08年8月、予定を繰り上げて帰国。その後の半年間で博士論文を仕上げ、翌09年7月に博士号を取得した。

2011年の外語祭ではフランス語学科の語劇に演者として参加した(最後列右端が桑田氏)。まずは"やってみる"ことを大事にしている。

知の往復運動にこそ意味がある

桑田氏が博士論文で採り上げたロラン・バルトは、エクリチュール(書くこと、書かれたものの意)についての論考で知られる思想家である。

「ロラン・バルトは、『書く』という行為の暴力性と倫理性について考察した作家でした。書くという行為は、ぼんやりとした印象を形にして定義することであり、それはある種の暴力性を伴う。例えば、『あなたは優しい人です』と書くことによって、その人の存在は独断的に規定されてしまいます。同時に、『厳しい人ですね』と書くことで単純に優しいだけの人ではないという、二重性が出てくる。つまり、書くという行為には、『あなた』が豊かな存在であることを保証するという面もあり、暴力性と同時に倫理性も内在することになる。そして、『優しい』という言葉を、紋切り型ではない別の言葉に置き換えるのが『文学』だと、バルトは定義したのです」

さまざまな知の領域を横断したバルトと同様、桑田氏の関心も多岐にわたる。現代フランス文学に軸足を置きつつも、哲学や美術、写真、建築、ダンスなど、幅広い分野で研究・執筆活動を展開。既存の枠組みを超え、知の世界を自在に駆けめぐること――それを、桑田氏は「ふらふらする」という独自の言葉で表現する。

「ふらふらするということは、『一つの視点に固執して問題を考えない』ということです。一つの視点に固執すると、自分が拠って立つ理論や立場をドグマ化し、いつしかそれを盲目的に絶対視するようになってしまう。すると、対象が何であれ画一的な見方をするようになり、知が硬直化してしまうのです」

近年は領域横断的な研究がさかんだが、領域を横断する意義とは、単に「複数の学問の視点からアプローチする」ことにあるのではない、と桑田氏は語る。

「例えば、文学の研究者である僕がダンスを見ると、ふだんの自分とは違う知性や感性が働きます。ダンスを通過することによって、初めて見えてくるものがある。未知のものにふれて『ふらふらする』と、思いもよらないフィードバックがある。こうした知の往復運動にこそ、意味があるのではないかと思うのです」

東外大に着任して約2年。東外大の学生は優秀でソツがない半面、物足りなさを感じることもあるという。

「遊びと勉強を対立項で捉え、寄り道をしようとしない学生が多いような気がします。『関心がある』のは国際関係で、文学には関心がない』という学生も少なくない。しかし、大学とは『役に立つ・立たない』という紋切り型の見方から自分を解放する場でもある。世の中で起こっていることに広く関心を持ち、枠組みを軽々と飛び越えてほしいですね」▼

今後も学術論文だけではなく、違う分野でも「書く」ことを続けていきたいという。

パリ第8大学の美術の授業の一環で、留学生だけでショートムービーを撮った。世界各国から集まったメンバーと(2列目左から3番目が桑田氏)。

「聴」

kiku

「聴は耳声を待つなり」。江戸時代の儒学者、荻生徂徠の言葉とされる。何気ない日常の中で、偶然あるいは必然に飛び込んでくる音がある。その音は突然で劇的かもしれない。音色に表情があるのなら、人は耳を傾け、そしてその音に隠されている心をつかまえようとするだろう。「聴」。五感で受け止めたその音色は、なぜか時が経っても色褪せることはなく、深く心に刻まれている……。

1. 音のない世界の人間観察

副学長
大学院総合国際学研究院 国際社会部門 教授
立石博高
Text : Hirotaka Tateishi

私は、18〜19世紀のスペインの歴史について研究を進めてきたが、そのきっかけのひとつは、プラド美術館で目にした一枚の絵であった。いまでも、真っ黒な闇のなかに浮かび上がっていた子供を食らう「サトゥルノス」をありありと思い出す。その見開いた眼は、たしかに私に何かを語りかけていた。私は、このような絵を描くにいたった画家の生涯と、その生きた社会のことを知りたいと思ったのである。さらに、堀田善衛の大作『ゴヤ』が、この時代への私の関心を決定的なものにした。

あれから40年、美術史研究も歴史研究も大きく進展して、堀田氏の描いたゴヤ像も大きく修正される。たとえば、同著第3巻のモチーフとなっている「巨人」の絵は、プラド美術館キュレーターによってゴヤ本人の描いたものではないとされている。いまや、晩年の作「ボルドーの乳売り娘」も含めて、ゴヤの作品かどうかのアトリビューションがかまびすしいのである。

しかし、いまだほとんど疑われていないこともある。1792年から翌年にかけて患った大病がゴヤの生涯にとって大転機となったということである。梅毒か鉛中毒か脳卒中か、病気の原因には論争が続いているが、ゴヤが聴覚を完全に失い、「一切の物音とは沈黙の壁によって遮断されてしまう」にいたったことに異論は挟まれない。だが大病を経てゴヤは、その後、本当に音の世界から遮断されたのであろうか。

たしかに最晩年のゴヤを友人モラティンは「年老い、聾で、体も弱って」いると述べている。だが、メルラン公爵夫人は、1802年にゴヤと出会ったことを追想し、2枚のデッサンについての画家とのやり取りを書きのこしている。たとえ耳が聞こえなかったとしても、ゴヤは、口元を見て相手の話を「聞く」ことができたとうかがえる。さらに1811年にゴヤは遺言状を公証人の前でしたためているが、そこには「耳が不自由なために」ゴヤに大声でそれを読んだと記録されている。まったくの聾者なら大声で読む必要はなかったろう。読唇術を心得ていたゴヤに、はっきりと口頭で伝えたと解するのが自然ではないだろうか。

キンタ・デル・ソルド（聾者の家）で描かれた「サトゥルノス」を含む《黒い絵》連作は、「人間の暗闇に潜む狂気と罪深さ」をひたすら追求した作品とされる。大病の後にゴヤは、さまざまなかかわりをもつ人々の口元を見て目で「聞く」ことで鋭い人間観察をしていたのだと考えると、「サトゥルノス」の目はゴヤ自身の目ではなかったかという想像にかられるのである。▼

たていし ひろたか
1976年東京外国語大学外国語学部卒業。78年東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了、80年同博士課程中退、同年同大学人文学部助手。同志社大学講師、助教授などを経て、92年東京外国語大学外国語学部助教授、95年より現職。著書に『スペイン歴史散歩――多文化多言語社会の明日に向けて』（行路社）など多数。

イラスト・ミヤギ ユカリ

2. 沈黙を聴きとる映画

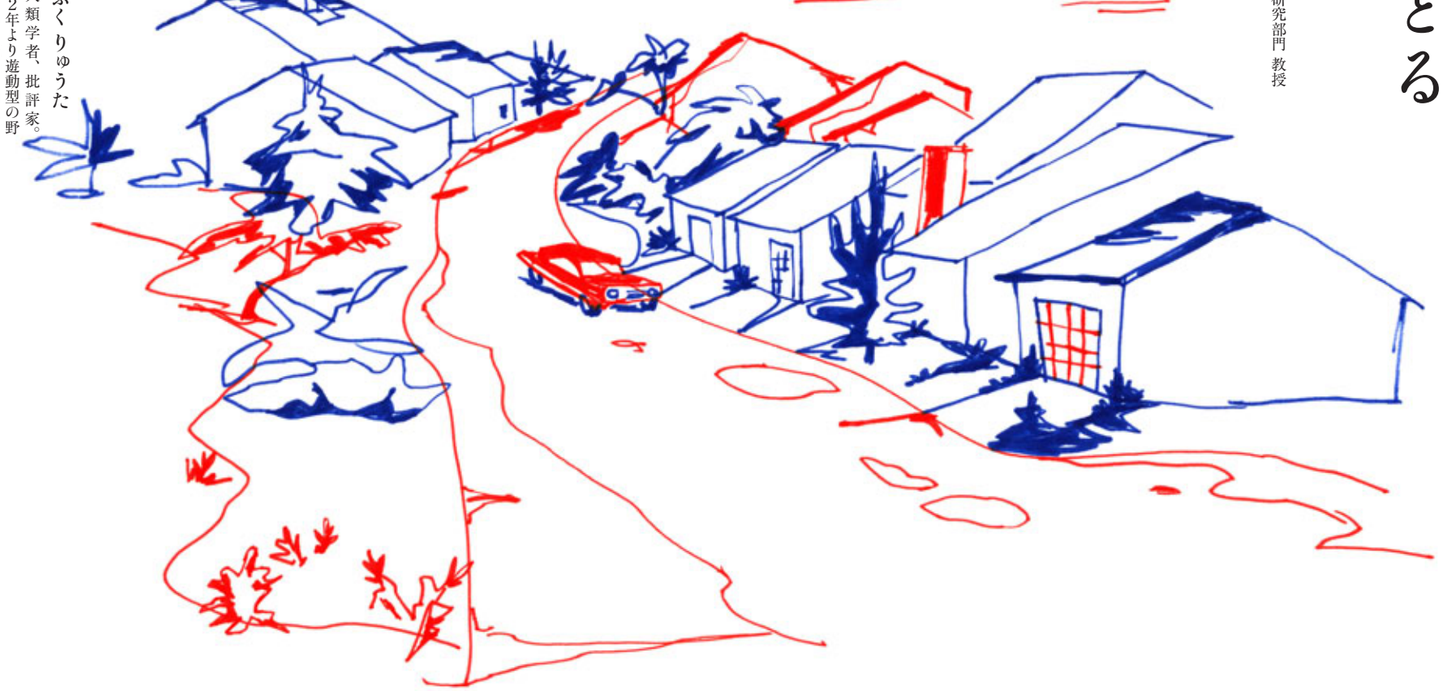
総合国際学研究院 先端研究部門 教授
今福龍太
Text : Ryuta Imafuku

ギリシア 映画の巨匠テオ・アンゲロプロス監督が1月末に76歳で亡くなった。撮影現場での不慮の交通事故である。やり場のない悔しさがある。あの稀有の「沈黙」の豊かさを体験することがもうできないとは。誰にも似ていない映画作家。彼は自分の美学にこだわり、音のない画面が延々と長回しで続く映像が退屈で「眠らない子どもを寝かしつけるのに最適」と批評家から揶揄されようと、その静謐なスタイルを決して変えなかった。

死の報を聞いて、私が偏愛する作品《永遠と一日》を想起する。港町テサロニキ。不治の病に冒され入院を明日に控えた老作家が、人生の最後の自由な1日を、ふとした偶然から難民の少年との奇妙な道行きに費やすことになる。人身売買の犠牲になりかけた少年を救い、国境まで送り届けようとする道中の合間合間に、親や妻や友人たちと過ごした過去のかけがえのない記憶が脳裏によみがえる。消えかけた命の灯火がふたたび明滅し、老いて衰えたからだが呻吟する現在が神々しい永遠の時へと魔術のように変貌してゆく。「永遠と一日」という表題は見事だ。もはやないはずの明日。だがそれは永遠への入り口かもしれない。彼に残された最後の1日という過酷な時計の時間性が消え去り、沈黙する映像の中から別種の時が、聖なる永遠が現れる。

老作家が1日の最後に市内を循環するバスに乗る場面がすばらしい。夜闇の中をひた走る目的地のない循環バスは、終わらない「永遠」の時の隠喩である。若い革命家や恋人たち、古の詩人や音楽家が時空を超えてバスに次々と乗り込んでくる。戻りえぬ歴史の時間からみれば亡霊でしかない彼らは、だが老作家が手にしかけている永遠の時の正当な住人として彼のもとに集まってくる。映像はここでも一切の台詞を廃し、沈黙したままだ。バスのドアが開閉する音が微かに持続するだけ。だがなんという豊かな沈黙だろう。

アンゲロプロスはいつも言っていた。「私の映画は劇場が完全に静かであることに懸かっている。台詞と同じだけの意味を担っている沈黙に耳を傾けること。子供が泣いたり、電話が鳴ったりする家庭のTVセットでは映画の沈黙を聴き取ることは決してできない」と。ならば私も、追悼のために急いで彼の映像を家で見ることは禁欲しよう。だれもが静かに映像に集中する劇場の暗闇。そこで実現される静けさの中で、アンゲロプロスの豊かな沈黙の響きを聴き取るために。▼



いまふくりゅうた
文化人類学者、批評家。2002年より遊動型の野外学舎である奄美自由大学を主宰。サンパウロ・カトリック大学客員教授も務める。著書に『荒野のロマネスク』『ここではない場所』『ミニマ・グラシア　歴史と希求』『群島―世界論』『薄墨色の文法』(以上岩波書店)、『クレオール主義』(ちくま学芸文庫)、『レヴィ＝ストロース　夜と音楽』(みすず書房)など多数。近著に『津波の後の第一講』(岩波書店、鵜飼哲との共編著)がある。

3. 死者の臭さと神の香しさ

アジア・アフリカ言語文化研究所 教授
深澤秀夫
Text : Hideo Fukazawa

マダガスカル 共和国の国語で、島の2000万以上の住人が母語とする言語がマダガスカル語である。この島の住人は、1500年から800年くらい前の間に、東南アジアの多島海からインド洋を渡ってやって来た人びとを祖先とするため、マダガスカル語はインドネシアやフィリピンあるいは台湾の先住民と同じ仲間の言語である。マダガスカル語で、鼻水をレル、涙を〈目の水〉と言い、日本語と単語合成が逆になっている。ところが、マダガスカル語には「見る」、「聴く」、「味わう」、「触る」の感覚動詞はあるが、「嗅ぐ」と言う動詞だけがない。この場合マダガスカル語では、〈匂いを聞く〉と表現する。

マダガスカルには、幽霊譚が多い。幽霊屋敷は町につきもので、そのための空き家が実在し、タクシーに乗せた女客が途中で消えたり、降りて入っていった先の家で既に死んでいた人間であることがわかったりといった都市伝説にもこと欠かない。私が30年近く調査を行っている北西部地方には、〈生ける死体〉の幽霊譚がある。ダンス大会などで出会った美女を口説き、暗がりに連れてゆこうとしたらふとその女性の姿が見えなくなり、後に「嫌な臭い」すなわち死臭が残されるという話である。マダガスカルには多島海の人びととの文化的な繋がりのせいか、一度仮埋葬した遺体を数年後に掘り出し、骨だけを墓に安置する改葬もしくは二次葬の習慣が存在する。祖先の霊を呼び出すことのできる霊媒の女性に「祖先なら誰でも可能か？」と質問したところ、死後数年以内の死者は「まだ臭い」ためそれはできないと答えてくれた。私にとっても村の葬式を想起させる五感の記憶とは、熱帯地域の室内に数日間置かれ血膿の滴る死体の発する臭いにほかならない。その一方、マダガスカル語で神を、〈香しい貴人〉とも呼ぶ。マダガスカルでは、「匂いを聞く」感覚が、〈臭い〉死者の世界と〈香しい〉神や祖先の世界を鋭く分け隔てている。▼

ふかざわ ひでお
1977年国際基督教大学教養学部社会科学科卒業。81年一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了、85年同大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学。専門は社会人類学。社会学修士(一橋大学)。

Influential Face

歴史を刻む在学生

Text by
Yoko Yoshida
Photo by
Misato Iwasaki

「内戦が絶えぬ母国の平和を夢見て」

ラジェンドルデ・バイラッセム

大学院総合国際学研究科 国際協力専攻 平和構築・紛争予防（PCS）専修コース 1年

紛争予防と平和構築の専門家を養成する大学院専修コース、PCS（Peace and Conflict Studies）。アジア・アフリカを中心に紛争当事国から留学生が集まり、平和構築の方法について学んでいる。アフリカ中央に位置するチャドからの留学生、ラジェンドルデ・バイラッセムさんもその1人だ。バイラッセムさんは母国で法律を学んだ後、人権擁護団体で活動していた。2011年、国際協力機構（JICA）の長期研修員制度を利用し東外大のPCSに入学した。

「ここに来たのは、紛争のメカニズムを理解し、チャドにおける紛争解決の仲介役になりたいと思ったから。PCSでの学びを活かして、世界中で起こっている紛争解決のために活動し、人類の幸福に貢献したいのです」

母国チャドも、数多くの紛争を繰り返してきた。1975年から90年までに四度の大きな内戦が起こり、無辜（むこ）の人々の血が流されてきたという。

「アフリカでは民主主義というシステムが十分に機能していない。政権交代がなく武力クーデターが頻発し、汚職や民族的対立も深刻です。民主主義の原則を無視したガバナンスの欠如が、紛争の原因となっているのです」

PCSでは、世界各地から集まった留学生がケーススタディーに取り組み、さまざまなテーマで議論を戦わせている。こうした授業は、紛争解決のヒントを得るのに大いに役立っているという。

「授業では、紛争の現場で何が起こっているかを学び、紛争の原因を理解して、解決につなげるためのグローバルな見方を身につけることができます。この貴重な機会を与えてくれたJICAに感謝しています」

東外大の留学生サポートの充実ぶりに感動したというバイラッセムさん。フランス語が母語のため、今は英語を学ぶだけで精いっぱいだが、「来年は日本語を学びたい」と意気込みを語った。

〈上〉PCSの定員は現在8名。「PCSは非常に有益。今後もっと多くの人が学べるようになれば」とバイラッセムさん。
〈中〉3カ月に1度、日本人のボランティアにフランス語を教えている。
〈下〉英語の辞書は24時間手放せない。

Mbailassem Le Djendolde
チャド出身。
母国の大学で2008年に法学のメトリーズ（修士1年に相当）を取得後、高校教師のアルバイトや人権擁護の市民団体を経験。JICAの長期研修員制度を利用し、2011年東京外国語大学大学院に入学。

News

お世話になりました。
退任する先生たちからの
「手紙」

富盛伸夫
Nobuo Tomimori

大学院総合国際学研究院
言語文化部門 教授
副学長

高校生時代、人間にとってことばの問題が決定的な問題であるという直感をいだいてから研究の方向に入ったのですが、初めて読む本は重要で、スイスの言語学者ソシュールの授業記録をまとめ直した『一般言語学講義』は、東京外国語大学で言語学を担当して25年になる今でも繰り返して読み、考える座標のひとつとなっています。学生さんと共に、ソシュールの言説に引きこまれながらも反発し、また戻って考えなおす、という繰り返しでした。

一方で、一読した瞬間に火花のように思想が弾け、自分のどこかと共鳴することばとの出会いもあります。それが、やはり学生時代に読んだ、フランスの比較言語学者エミール・バンヴェニストの『一般言語学の諸問題』です。人間と人間とをつなぐ言葉、その研究には「話す主体」へのまなざしが必要です。「ヒトは、発話して、初めて人間となる」というバンヴェニストの言葉は、言語学を超えて、人間の学としての根源的な閃光を放っています。

◉お薦めの1冊
『一般言語学の諸問題』
みすず書房
エミール・
バンヴェニスト(著)
岸本通夫(監訳)
一言……「ことばにおける「主体性」の視点から、現代言語学にコペルニクス的転換をうながす珠玉の言語学論文集」

中谷英明
Hideaki Nakatani

アジア・アフリカ言語文化研究所
教授

大学に入って1年、大地原豊先生から習い始めたサンスクリットに魅入られるようにしてブッダの言葉を突きとめたいと思うようになりました。世界中の誰も成功していなかったのですから、思えば大きな賭けでした。40人の仲間と原始仏典データベースを作ったり、２００人の仲間と特定領域研究「古典学の再構築」をやったり、日、仏の70人と「総合人間学」をやるなど実にいろいろのことをしましたが、ブッダの言葉とおぼしきテキストを特定できたのは10年前。インド人が３０００年以上前に開発した高度な口伝え技術のおかげで、テープレコーダーにとったように正確に残っていました。嬉しかったですね。このテキストは、四聖諦とか八正道などの原始仏教の教理とは相いれない立場を述べることが判りました。驚いたことにブッダは世界を複雑系として理解していたのです。そのメッセージは「自分らしくありなさい」。複雑ではなくて単純ですね。この言葉を皆さんに贈ります。

◉お薦めの1冊
『いち・たす・いち』
紀伊国屋書店
中田 力(著)
一言……「脳のしくみをもっとも簡単に説き明してくれる本。複雑系もほんのすこしわかります」

宗宮喜代子
Kiyoko Sohmiya

大学院総合国際学研究院
言語文化部門(英語)
教授

外語大には20年前、44歳で着任しました。当時の「一般英語」を担当して、大教室に詰め込まれた70名もの学生さんたちが静かに授業に集中する姿を見て感動したことを覚えています。今の小さなクラス編成から見ると嘘のような話ですが、西ヶ原時代の、夏は冷房もない環境で皆がんばっていたなあと感慨深いものがあります。

私自身は中学1年で英語に出合って以来、意味論にはまっています。英語で「This is a pen」と言うと、自分がペンを認識した自覚が生まれ、「Stars are shining like diamonds in the sky」では夜空の星がチカチカとまぶしく心に届きました。そんな私と同じように英語を愛し言語に魅了された学生さんが外語大には大勢いて、冷房があろうが無かろうが、言語を論じ文法を語って、いっしょに熱い日々を過ごしてきました。

どの言語にも個性と「人格」があります。言語との出合いは少なくとも親友1人分ほどに貴方の人生を面白くしてくれることでしょう。

◉お薦めの1冊
『アリスの論理――不思議の国の英語を読む』
日本放送出版協会
宗宮喜代子(著)
一言……「英語に親しみ、言葉について考える楽しさを味わえる一冊です」

中澤英彦
Hidehiko Nakazawa

大学院総合国際学研究院
言語文化部門(ロシア語、ウクライナ語)
教授

「失礼ですが、日本の方ですか」。モスクワの書店で初老の男性に声をかけられた。男性は自己紹介の後、日本語を習った訳を語った。昔から日本にあこがれていて、偶々私を見かけ、つい声をかけてしまった。こう失礼を詫びると去っていった。完璧な日本語だった。

驚いた私は、男性の後を追い尋ねた。なんと日本人と話すのは私が初めてだという。なぜそんなに日本語が上手なのかと問うと「私には3人の先生がいました」と答えた。日本語のレコード3枚を何度も聞いてつぶしてしまった。レコードが教師で、あとは文法書1冊、それしかなかったそうだ。

それだけで日本語が身につくのか。衝撃だった。何百冊の書籍、教材を持ちながら、言いたいことも満足にいえなかった私は、男性を引き止めた…。

１９７５年、縁あって本学に奉職し、いま「卒業」する私は、あの教養豊かな男性のいかにも満足そうな笑顔を不思議に思い出すことが多い。

◉お薦めの1冊
『漢詩大系 第六巻 唐詩選上』
集英社
斉藤 晌(著)
一言……「唐詩選―自然や人生に対する深い思いに満ち、西域への憧れが掻き立てられる、是非手にとってほしい一冊です」

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

〈編集後記〉本誌も3度の春を数えることになった。2学部体制のもとではじめてむかえる学生諸君と、外国語学部に在籍する昨春以前にむかえた学生諸君のあいだに、どのような絆がむすばれるのか——それが東外大の未来を決める。特集に寄せられた諸先輩の声はどれも、かけがえのない体験をふまえ、後輩たちに贈られた心のこもった励ましのことばだ。それをどう活かすかが問われている。（編集子）▼

GLOBE Voice
グローブヴォイス
2012 Number 5
The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2012年3月発行
発行＝東京外国語大学
〒183-8534 東京都府中市朝日町3・11・1
総務企画課広報係

編集＝広報マネジメント室
編集協力＝日経BPコンサルティング
印刷＝大丸グラフィックス

アートディレクション＝犬飼健二
表紙撮影＝市橋織江
デザイン＝茂谷淑恵（犬飼デザインサイト）

©東京外国語大学2012
本誌記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。